

国指定の天然記念物

ヒメハルゼミの

生息する極相林

No.387

「茂原市」天然記念物のキードをウェブで検索すると、最初に①鶴枝ヒメハルゼミ発生地②橋樹神社の社叢③コイ科タナゴ亜科関東固有種のミヤコタナゴの3件がヒットすると思います。

また、『日本の天然記念物』全6巻（加藤陸奥雄・沼田眞編1984、講談社）の2分冊目の動物Ⅱ・天然保護区域の34頁にはミヤコタナゴの、58頁には鶴枝ヒメハルゼミ発生地の記載があります。さらに、鎮守の森を研究テーマにしている社叢学会の存在も知るに至りました。

さて、学生時代に生態学の講義の冒頭で三島次郎氏が「保護動物だけを話題にして守ろうという主張は、人体から心臓だけを話題にして守ろうという議論に似ている」という様な事をおっしゃっていた記憶があります。心臓には肺から送られる動脈血や腎臓による老廃物の除去等が必要のように、ミヤコタナゴもヒメハルゼミも、

その生息場所の環境に支えられているわけで、ミヤコタナゴには谷津上部からの清流や産卵場所のマツカサガイ等が必要で、ヒメハルゼミには照葉樹であるスタジイヤカシ類の高木だけでなく、成熟した階層構造をもつ「鎮守の森」が必要であるに違いありません。



▲ヒメハルゼミの羽化の様子

今回は①についての踏査直後に綴った短文を紹介させていただきます。ただ、これにいたします。

鶴枝の八幡神社には国指定の天然記念物であるヒメハルゼミの生息する極相林があります。神社やお寺に隣接する鎮守の森は、数百年以上にわたり人間が残した自然として点在してきました。しかし近年、モーターゼーションの影響による開発行為によって急激に減少しています。鶴枝の森の高木層は優占種の高さが15m直径が60cm以上になるスタジイです。成熟個体の中には枯死した倒木もありますが、ギャップには次の世代の幼木や別種のアラカシも認められます。さらに林床に目をやると、優占種はオオアリドオシという棘の

ある小さな木本で、他にオモト、ヤブラン、リヨウメンシダ、イチヤクソウ、フユツタ、マンリョウ、ベニシダ等が認められ、草本層を形成していました。ヒトの背丈ほどの低木層にはアオキ、トベラ、ヒイラギ、ヤツデ、ヒサカキが目立ち、10m程度の亜高木層には、カクレミノ、ヒメユズリハ、カゴノキ、リンボク等が認められました。この森は小高い標高20m〜40m程の鞍部に成立しています。周囲は縄文海進時には海であった10m程の平野部で、境界部分は昔の海食崖が切り立っています。この斜面に多いのがマダケやヤダケ、アズマネザサ等です。フジヤツルグミ等の絡みつき植物もその内側に目立ちます。北部にはマダケが優占する竹林があり、地域の方々が増殖するのを抑えているとこのことです。また、西部の公民館に隣接する崖付近にはコナラが生育していることから、攪乱を受けた場所だと推定されます。夏には鶴枝小学校3年生によるセミの抜け殻調査が行われています。

〈茂原市文化財審議会委員〉
宮本 明宜

問合せ

生涯学習課（9階）

TEL (20) 15559 FAX (20) 16007

文芸コーナー

散歩の途中

快晴の一月半ば
頬に冷たい風が吹く午後
遊歩道を歩いている
馴染の大きな樺は素裸で
真青な空に向かって
キリツと立っていて清々しい

山本 明美

辛夷も桂も太い幹と
枝だけになってるが
どちらも銀白食の小さな
固い蕾をつけている
弱い冬場の中でジツと
春を待つ姿がいじらしい
枯芒の空地に女の子が居る
二、三本の芒を手折り
上下左右に激しく振って
穂を飛ばしている
旅立ちを急かされた穂が
慌てて風に乗る様子が
可愛いおかし

いつも通る遊歩道の景色を
キョロキョロ見回す
見る度どこか少し違って
留まらない時を
入れ替って行く生命の時を
眺め感じ楽しんでる

◎選評 齋藤正敏

遊歩道を歩いている。馴染の大きな樺は青空に向かって キリツと立っていて清々しい。辛夷も桂も春を待つ姿がいじらしい。芒を手折り 穂を飛ばしている女の子。印象的な光景だ。入れ替っていく生命の時を眺め感じている作者だ。観察眼が光る。

- 偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
- 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先（直接選者）へ 〒297-0032 茂原市東茂原7-55 齋藤正敏宛。
詩は随時募集しており、どなたでも応募可能です。たくさんのご応募お待ちしております。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

